

特攻に行ったのは人間

特攻に行ったのは「人間」でした。
昭和二十年の六月梅雨時だったと思います。連日降雨続きでした。

神奈川県厚木海軍航空隊で夜間戦闘機の偵察員として勤務して居ました私が思いも掛けぬ出来事が身近におきました。



硫黄島が占領され、沖縄の地上戦も終わりに近く日本の制空権も制海権も敵軍の手中の物と成りました。最後の抵抗の特攻攻撃が続けられて居りました。

た。
福島県郡山海軍航空隊で結成された彗星艦爆機数機の特攻隊が九州南部の基地から沖縄へ出撃の日程調整で、移動途中で厚木航空隊で三泊しました。
到着の数日前に飛来を聞かされた私は厳粛に受け止めて見守っていました。
到着の翌日の夕刻、特攻隊員の動向として聞かされたのは、只々驚かされる事でした。「朝から酒浸り、上下関係が無くなって下級が上級に殴りかかっている。全員が性病だと大声でわめいている。よそ者は手の付けようが無い状態だ。」

私はこれが本当の「人間」だと思いました。美化した「神がかり」の特攻隊員も居たのでしようが、私には「人間」を見せて散って行った彼等に最大の敬意を示し冥福を祈ると共に、若くして逝く無念さへの慰めの祈りが終生忘れられぬところと成りました。
此の国から戦死者を再び出すことが在ってはならないと、あの日から私は願い続けて居ます。あの時私は満十七歳と十一か月でした。

海洋町 工藤 彌

カンパ有難うございました

年末にお願いいたしましたカンパに、多くの方にご協力をいただきました。本当に有難うございました。

芦屋「九条の会」は、憲法9条を守り生かすため、9周年記念のつどいやニュースの発行、学習会などを引き続き行います。

カンパは、これらの活動に充当させていただきます。



代表 福間 公子

《芦屋「九条の会」9周年記念のつどい》

戦没画学生からの伝言 ～いのちの叫び～

画家になることを夢み、生きて帰って絵を描きたいと願いながら戦地に赴いた画学生たち。しかし、その指に絵筆が握られることは二度とありませんでした。青春の輝き、恋人への想い、無理やり引き裂かれたいのち。若き画家たちが残し、遺族の方々が守り続けてこられた作品と遺品の数々が収められた「無言館」。

館主の窪島誠一郎さんに「無言館」のことをお話しいたします。

日時：6月28日（土）14:00～16:00

講師：窪島 誠一郎さん

会場：上宮川文化センター ホール（予定）

参加協力費：500円（高校生以下無料）

詳細が決り次第、お知らせします。

